

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

確定判決を守らない国こそ「憲法違反」！

国はいまこそ協議に応じるべき！

【佐賀新聞2015年9月15日】

諫早制裁金訴訟で高裁が和解勧奨
漁業者側了解も国側が拒否

国営諫早湾干拓事業の開門調査を命じた確定判決の勝訴原告である漁業者らに制裁金などの強制執行をしないよう国が求めた請求異議訴訟の控訴審第3回口頭弁論が14日、福岡高裁で開かれた。大工強裁判長は非公開の進行協議の中で、双方に事実上の和解協議に応じるよう勧奨した。漁業者側が了解したのに対し、国側は応じない姿勢を示したとみられる。

弁論後、裁判所は交互に繰り返し国側と漁業者側と話し合った。漁業者側弁護団によると、国は裁判所からの「解決に向けた協議」の提案を固辞した。持ち帰り検討することも拒否したとい、裁判所は「次回10月26日の口頭弁論で再度、意向を確認する」と述べたという。

国が和解協議に応じない場合、結審する公算が大きい。

大工裁判長は今年7月、漁業者の開門請求を退けた別の訴訟でも裁判長を務めた。判決で、国と長崎側が和解協議に応じなかった点を「極めて遺憾」と批判、国には「最善の方策を自ら早急に決定し、実現に向けた努力が求められている」と呼び掛けている。

漁業者側の馬奈木昭雄弁護団長は「通常、和解協議の提案は一方の当事者が拒否すればそこで終わるが、裁判所が何度も食い下がった点に並々ならぬ決意を感じた」と評価した。一方、協議を拒否した国に対しては「法的義務の板挟み状態にあると言いつつ、開門しない姿勢を貫いており、話し合いにすら応じないのは理不尽」と批判した。

【長崎新聞論説2015年9月8日】

司法任せ改め、国の責任で

国営諫早湾干拓事業で造られた潮受け堤防の即時開門を求めた漁業者らの訴訟の控訴審で、福岡高裁(大工強裁判長)は7日、一審・長崎地裁に続き、開門請求を退ける判決を出した。

(中略)

いずれにしても、堤防開門で裁判所が別々に「認める」「認めない」の相反する判決を示し「司法のねじれ」が生じて事態が混乱している問題が、7日の高裁判決で解消されたわけではない。また、10年12月に、漁業被害との一定の因果関係を認めて開門調査を命じた福岡高裁の確定判決が覆ったわけでもない。このため、高裁が命じた13年の開門期限が過ぎても国が開門しないことから、確定判決に従わない国に1日90万円の制裁金を支払い続

けるよう命じた判決も効力を維持しているため、制裁金という形で税金が無駄に流出し続ける異常事態はなお続く。

このまま開門派、開門反対派が訴訟合戦を続ける事態が続いている。有明海の周辺で生きる漁業者、農業者など地域住民の亀裂は深まるばかりで、弊害が大きすぎる。

訴訟合戦を見守る県民、国民にとっても、開門の是非をめぐって相反する判決が存在するという、複雑な訴訟の全体像は分かりにくく、複雑な者の活発な議論を妨げる結果を招いている点で問題だ。

やはり、なによりも、そもそも混乱を招いた当事者である国が、事態收拾の責任を負うべきだ。そのためには、漁業者、農業者が共存できる解決策を早急に示し、円満解決に向けて協議を促進する努力が求められる。司法のねじれの決着は最高裁に委ねられるが、それを国が漫然と待っているのでは、国の責任放棄と批判されて仕方ない。国は司法任せの姿勢を改め、当事者としての責任を果たすべきだ。

ここ数年で最大級の赤潮被害！

【佐賀新聞2015年9月12日】

有明海北部で赤潮発生、県水産振興センター「ここ数年で最大級」

魚類やエビ、カニなどの漁に影響を与えるシャットネラ赤潮が8月

下旬から、佐賀県沖の有明海で発生している。県有明水産振興センターが4日に実施した調査では、発生域が有明海北部の約半分にまで拡大。11日の調査でようやく鹿島市沖から太良町沖に縮小したものの、漁業者からは「魚の群れが見られない」と不安の声が聞かれる。

「コハダの群れが海面に浮いてくる時季なのに、ほとんど姿を見かけない。おそらく赤潮が届かない海域や深いところに逃げているんだらう」。投網でコハダなどを取っている弥永達郎さん(59)は藤津郡太良町大浦は顔を曇らせる。「水揚げは平年の半分以下。(赤潮を避け)遠い沖まで行くから燃料代もかさむ」と不安は尽きない。

赤潮が目立つ場所では、海水が茶色がかつた深い赤色となり、層が厚く中の方までドロドロしている。弥永さんは「毒性のプランクトンだから、あらゆる生き物に影響を及ぼす。成魚になる前の稚魚やエビ、貝類の生育の場であり、赤潮で死ぬと有明海全体の資源が減る。これが一番の問題」と危惧する。

投網漁師の寺田豊さん(45)も「同様に投網漁を始めて20年になるが、ここまでひどい赤潮は初めて」と驚き、「仲間の話では、鹿島沖でコハダやスズキが死んで海面に浮かんでいたという。ここまで消えないのは珍しい」と困惑する。(中略)同センターは今後も週1回程度の調査を続け、情報提供していく。